

「アフター・ザ・コーブ — 逸脱する捕鯨推進と文化人類学の功罪：  
『ザ・コーブ』の後から見えてきたいくつかの事柄について —」

白田乃里子

(捕鯨関連民族誌映画放映あり)

捕鯨文化とは、一体、誰のための文化なのか、という問いがいつもわたしの心に重くのしかかっていた。「文化」という言葉が持つポジティブなイメージを付与する政治性が、人々の語りを管理する機能となってしまったからだ。本研究はビデオ撮影により、語られることのなかった場面をビジュアル化し、捕鯨推進政策の問題を問う。特に注意を喚起したいのが、国連環境会議（1972）の事実関係である。元 IWC 代表、米澤邦男氏の主張によると、ニクソンがベトナム戦争からの焦点をそらす為に鯨を出したのだとし、擬似ドキュメンタリーが流布する原因となっている。しかし、これに関わったのは、ベトナムの焦点をそらすどころか、ベトナム反戦運動に参加したヒッピー達であり、後にシリコンバレーの精神を築いた若者たちであった。グローバルな利益集団を下支えにする陰謀論は、日本になんの利益ももたらさない。